



京都産業大学世界問題研究所

ニューズレター

NEWS LETTER

VOL. **3**
2012. 10

CONTENTS

研究所の活動

平成 24 年度上半期 世界問題研究所の動き
法学部 芦立 秀朗 2

京都産業大学世界問題研究所
上海社会科学院国際関係研究所学術交流研究会概要
世界問題研究所 宮崎 寛 3

世界の窓

初期の世界問題研究所・瞥見
法学部 川合 全弘 7
現地調査報告：第 121 回アンベードカル生誕祭 於インド・ナーグプール
文化学部 志賀 浄邦 10



POWER UNIV. 
京都産業大学

【研究所の活動】

平成 24 年度上半期

世界問題研究所の動き

法学部 准教授 芦立 秀朗

平成 24 年 5 月 23 日：第 1 回 研究会

報告者：徐 興慶 (台湾大学)

タイトル：「被殖民／近現代：外来政権における台湾知識人—アイデンティティーの転換を考える—」

1

平成 24 年 6 月 27 日：第 2 回研究会

報告者：岩本誠吾 (所員)

タイトル：「サイバーセキュリティの構築に向けて：現状と課題」

2

平成 24 年 7 月 25 日：学術交流研究会「日米中関係とアジア地域の安定化」

(報告者などの詳細は別頁参照)

3



日米中関係とアジア地域の安定化

開催日時 2012年7月25日(水) 9:30～17:30

開催場所 京都産業大学 むすびわざ館 3-A 教室

司会・報告者 **東郷和彦** (京都産業大学世界問題研究所長)
劉 鳴 (上海社会科学院国際関係研究所副常任所長)
劉 阿明 (上海社会科学院国際関係研究所准研究員)
高原秀介 (京都産業大学世界問題研究所員・外国語学部准教授)
高 蘭 (上海社会科学院国際関係研究所研究員)
金 永明 (上海社会科学院法学研究所准研究員)
岩本誠吾 (京都産業大学世界問題研究所員・法学部教授)

参加者 本学世界問題研究所員、本学教員・大学院生、他大学の研究者



プログラム

開始時刻	司会者／報告者／コメンテーター		内 容
9:30	司会者	東郷和彦 (京都産業大学世界問題研究所長)	開会の挨拶
9:40	報告者	劉 鳴 (上海社会科学院国際関係研究所副常任所長)	アメリカ対東アジア戦略変化と中国への影響
10:10	報告者	劉 阿明 (上海社会科学院国際関係研究所准研究員)	米中对東南アジア戦略及び東南アジアでの役割
10:40	コメンテーター	高原秀介 (京都産業大学世界問題研究所員・外国語学部准教授)	米国の東アジア戦略の変化と東南アジアめぐる米国の戦略
11:10	コーヒーブレイク		
11:25	司会者及び参加者	ディスカッション	
12:30	司会者	東郷和彦 (京都産業大学世界問題研究所長)	まとめ
12:30	昼 食		
13:35	報告者	高 蘭 (上海社会科学院国際関係研究所研究員)	日本対中外交戦略と日中関係
14:05	報告者	金 永明 (上海社会科学院法学研究所准研究員)	海洋問題と国際法
14:35	コメンテーター	岩本誠吾 (京都産業大学世界問題研究所員・法学部教授)	国際法から日中関係を考える
15:05	コーヒーブレイク		
15:20	司会者及び参加者	ディスカッション	
16:50	司会者	東郷和彦 (京都産業大学世界問題研究所長)	まとめ及び閉会の挨拶

研究交流会の概要

第1回目となる研究交流会は、世界問題研究所・東郷和彦所長による挨拶をもって開始されました。まず東郷所長が、今年（2012年）のはじめに上海社会科学院との交流協定を結ぶことができ、その実質的交流の第一歩がこのような形で開催できることをうれしく思うと述べられました。これに対し上海社会科学院国際関係研究所・劉鳴常任副所長は、継続的に京都産業大学と研究を続けることでともに発展していけると確信していると述べられました。



東郷和彦所長によるあいさつ



劉鳴常任副所長によるあいさつ

劉鳴氏は第一報告者でもあり、「オバマ政権の対東アジア戦略変化の評価」と題してお話いただきました。はじめに、米国のシンクタンクによる報告書を通じて過去の対アジア戦略の変化が概観され、米国がいかにか中国を意識しているかが示されました。次に、ASEAN－中国－米国の関係およびバランス、南シナ海への注目などを例に、米国



劉鳴氏の報告

が求める「多国間協調」は、米国の国益に奉仕し中国を制約するため非平和的な状況を作り出していないかと指摘されました。同時に、米国が自身の政策を過大評価しているのではないかと、中国に対しては協調姿勢と同時に疑いの姿勢も示し、矛盾を表しているのではないかと、といった疑問も出されました。最後に、米国の対アジア戦略は従来通り二国間同盟の側面を持ちながらも、(日米豪など) 三国間関係の強化や東アジアサミットのような多国間枠組みへの参加を通じて、介入の度合いを強めつつある点がここ数年の変化の特徴として挙げられました。

つづく劉阿明氏には「米中对東南アジア戦略とその影響」と題してご報告いただきました。最初に中国の東南アジア政策の目標として、東アジアの安定的安全保障環境の維持、政治経済の発展を目指した対東南アジア関係の深化、中国と友好関係を持つ国を育て、「封じ込め」政策に打ち勝つこと、の3点が挙げられました。これらの目標達成に向けた主要政策として、魅力によって相手国を惹きつける外交の重視、ASEANの地域形成の重視および相互協力ルートの強化、ASEAN貿易枠組みの拡大・深化、対東南アジア経済援助の継続が紹介されました。次に、これと比較する形で米国の対東南アジア戦略が紹介され、当該地域国家との協調促進による対テロ網の強化、対中国のバランス維持としての関係形成がその特徴として論じられました。米国が伝統的優位性を生かしながら当



劉阿明氏の報告

該地域の秩序形成を試みるのに対し、中国は経済協力面での関係強化に成功し、優位に立っている点が確認されました。

以上2つの報告に対し、外国語学部の高原秀介氏がコメントされました。まず劉鳴氏の報告に対し、米国が必ずしも覇権的利益の損失を防ぐという政策をとっているわけではないのではないか、中国に対しては、その動きを抑え込むというよりは国際的規範の遵守を求めているのではないかと、という疑問を提示しました。劉阿明氏の報告に対しては、東南アジア地域における中国の台頭により、当該地域の安全保障上の独立性が損なわれているのではないかと、という質問がなされました。また、アジア太平洋や対テロというより広い枠組みでの米国戦略の変遷を見据え、地域秩序の安定と経済的安定という視点から分析する必要があるのではないかとコメントが加えられました。



高原秀介氏のコメント



高蘭氏の報告

午後の部は高蘭氏による報告「中日関係の現状、問題と展望」からスタートしました。高蘭氏ははじめに日中の政治状況を分析されました。その中で日中国交正常化40周年、小泉内閣から野田内閣に至る首相交代、中国の政権交代が触れられ、経済関係の好調さと政治状況に対する不信感が浮き彫りにされました。次に日中間の課題として歴史認識、海洋問題、国民感情、日中韓FTAが取り上げられ、特に感情問題については、領土問題における日中での詳細なアンケート結果を基に、その影響の大きさが明らかにされました。領土・海洋問題への具体的視角として民族問題、棚上げの可能性、尖閣列島の日中共同管轄論、戦争論の可能性の4点が挙げられました。以上の課題に対し、安全相互信頼関係の醸成、国民感情問題を改善させる文化的交流、多国間枠内における中日関係の深化、中日海洋危機管理メカニズムの強化、両国政府間の交流チャンネルの拡大化が対策として提示されました。

最後の報告者である金永明氏は「海洋法から見る中米排他的経済水域内の軍事活動についての論争」と題し、午前中の部の議論を踏まえてお話しいただきました。はじめに、「南シナ海問題」が着目され、そこには海洋資源利用・開発から発生する問題、航行の安全保障の問題、中国－東南アジア間の領有権問題、具体的政策を欠く南シナ海共同宣言、米軍との共同演習の問題という複数の要素が複雑に絡まり合っているとされました。次に、その紛争に関する法的対策の可能性が論じられました。特に注意点と



金永明氏の報告



岩本誠吾氏のコメント

して、国によって問題に対する考え方・アプローチの仕方が異なるという点、および国際法的枠組みの消化具合が国によって異なるという点が挙げられました。最後に、その解決プロセスには(1)低レベル(敏感でない)問題における協力体制の形成、(2)信頼関係醸成後のルール制定、(3)領土問題の実質的解決もしくは共同開発、という3つのステップを踏む必要があると論じられました。

午後の2つの報告に対し法学部の岩本誠吾氏が「国際法から日中関係を考える」と題し質問およびコメントをされました。まず日中関係を分析するための法的枠組みとして、日中共同声明、日中平和友好条約、日中共同宣言が挙げられ、「求同存異」「反覇権条項」という概念が注目されました。次に、過去に中華思想が形成していた華夷秩序とヨーロッパの国際秩序との相違が指摘され、現在の国際法は後者の秩序を前提にしていることが確認されました。

その中で、中国が尖閣問題を論じる際に用いる「核心利益」が国際法上何を意味するのか、という問いが提出されました。次に、(軍事的ではなく)国際法的な解決の一つとして、中国が国際司法裁判所に提訴し、日本が応訴するという選択肢が「求同存異」のメカニズムとして示唆されました。最後に、国際法の枠組みが特に排他的経済水域の問題に対し海洋法条約が不完全であるため、当該国同士による協定・共通ルールの形成、南シナ海の共同宣言(紛争を悪化させる行為の抑制)が必要であり、その具体的手段として、第三者機関で議論すること、ASEANとの間にメカニズムをつくることが挙げられました。

高原氏および岩本氏によるコメント・質問に対し、報告者から更なる応答がなされました。また、フロアからもコメント・質問が相次ぎ、東アジアで現在最も大きな問題になっている海の安全の問題を中心に、活発な議論が行われました。



【世界の窓】

初期の世界問題研究所・瞥見

法学部 教授 川合 全弘

目下、世界問題研究所の50周年史編纂の一環として、資料収集と年表作成とに従事している。この作業を通じて得たささやかな知見と感想をここでいくつか記したい。

世界問題研究所は、本学創立から間もない昭和41年5月15日に本学最初の付置研究所として設立された。それから昭和55年に本学内に移設されるまでの約14年間、研究所の施設は東京都新宿区の野口英世記念会館内に置かれた。この間の所長は、初代が岩畔豪雄（昭和41～45年^{*註}）、第二代が若泉敬（昭和45～55年）のお二人である。岩畔先生は、所長に就任する以前から本学の設置発起人及び理事を務めた、本学設立の中心人物の一人である。若泉先生の本学教授就任は昭和41年4月のことである。荒木俊馬日記によると、この年の1月27日に、荒木学長が泊まる東京のホテルに岩畔先生が若泉先生を伴って訪れている。この記述が公刊された荒木日記における若泉先生の名前の初出であること、その後同年3月9日に若泉先生が荒木学長をホテルに訪ね教授就任承諾の旨を伝えていること、また岩畔先生と若泉先生との経歴・人脈上の接点が陸軍省ないし防衛庁にあることなどから考えて、恐らく岩畔先生が若泉先生を荒木学長に推薦したのではないか。荒木先生は昭和53年7月10日に在職のまま逝去されているので、二代の所長の合計在任期間は荒木学長の在任期間とほぼ重なる。二代の所長の名前が頻出する荒木日記からは、荒木先生が両所長と頻繁に連絡を取り合い、また東京や京都で開かれた研究所の会合に熱心に顔を出されていた様子が窺える。本拠が東京にあったことと、二代の所長と荒木学長との緊密な連携とによって特徴づけられるこの14年間は、研究所の歴史の中でも特別の時期である。ここではこれをさしあたり研究所史に

おける第1期と呼んでおきたい。

*註 昭和45年11月22日に在職のまま逝去。

ところで世界問題研究所はなぜ東京に設置されたのだろうか。研究所はそもそも何のために作られたのだろうか。日本の現代史にそれぞれ大きな足跡を残した岩畔先生と若泉先生にとって、研究所の存在意義が大学を超える大きな文脈の中にもあったであろうことは想像に難くない^{*註}。しかしこれを考えることは本稿の範囲を超える。他方、荒木先生の側から見れば、研究所は東京における学長の活動拠点として機能したように思われる。荒木日記によれば、荒木学長は、政官財各界、外国大使館、在京文化人を訪れ、また外国からの賓客を羽田に迎えるために、在職中ほぼ毎月と言ってよいほど頻繁に上京している。その足場となったのが世界問題研究所（ないし本学東京事務所）であった。荒木日記には、上京中の荒木学長に、さながら身に影が添うように若泉先生が付き添っていた様子が記されている。こうして見れば、二代の所長の役割は、詰まるところ荒木学長と学外の幅広い世界とを仲介し、生まれたばかりの大学のために国内外の多彩な人脈を開拓することにあつたように思われる。アーノルド・トインビー、ハーマン・カーン、レイモン・アロンなどの名だたる知識人の招聘、岸信介及び福田赳夫の両元首相との密接なつながりなどは、その成果の一部であった。そしてこのような活動のために研究所は東京になければならなかった。

*註 若泉先生が当初の数年間担当科目を一つも持たなかったことは、学内的視点からは説明がつきにくい。一方における昭和41年1月22日開催の

理事会での研究所設置に関する審議（荒木日記に拠る）と同月27日の若泉先生の「面接」とから同年5月15日の研究所設置へと至る学内の慌しい動きと、他方昭和42年から本格化する若泉先生の「密使」活動とが時間的に連続していることは、単に偶然の一致とは考え難い。かつて日米開戦回避に奔走した岩畔元陸軍少将と佐藤政権中枢に位置する福田自民党幹事長とが当時ともに本学理事を務めた事実を媒介項に置かならば、研究所は、荒木学長の了解の下に若泉先生の「密使」活動をカムフラージュするために作られたのではないかとさえ思えてくる。

この第1期は、資料の甚だしい乏しさという特徴を併せ持つ時期でもある。このことは、研究所の活動の中心がこのような舞台裏での仲介と人脈開拓にあったこと、及び二代の所長が公人としての活動の重心を学外に有し、その行動スタイルがいずれも非公然性を重視するものであったことと密接に関連しているように思われる。いずれにせよ第1期には、研究所の名において公刊されたまとまった資料は、これまでのところ見当たらない。『世界問題研究所紀要』と『世界の窓』の創刊はそれぞれ昭和55年4月と昭和61年3月であり、いずれもこの時期の後になってからのことである。第1期の研究所の活動とその成果を伝えるまとまった公刊資料としては、この時期の終わり近くに「世界問題研究所特輯」のNo.1とNo.2として

編まれた『京都産業大学論集』の第6巻第4号（昭和52年9月30日）と第7巻第3号（昭和53年7月10日^{*註}）が恐らく唯一のものである。

*註 ちなみにこの日付が荒木先生逝去の日付と一致していることには、若泉所長の深い弔意が感じ取られる。

さてこれら2編は、第1期の後半に研究所に萌した大きな変化を物語る重要な資料でもある。というのも、仲介を中心とする当初の活動に加えて、この頃に本格的な学問的共同研究の動きが開始され、その最初の成果をまとめたものがこれら2編であるからである。研究所としての研究活動自体は、すでに昭和47年発足の共同研究「学問の将来と大学のあり方」とともに始まっていた。しかし荒木学長の言によれば、これは「京都産業大学の将来に目指すべき理想的教学体制」の研究であり、いまだ「本研究所の趣意書に添うた本格的な研究」ではなかった。後者に該当する最初のものが、昭和51年4月に発足した総合研究「世界秩序の形成と新学問体系への展望」であり、この研究の一環として行われた2回のシンポジウム「世界における日本の文化——いま問われるべきものの本質——」（正・続）^{*註}の記録を編集したものが上記の2編である。シンポジウムに出席した荒木学長は、その真剣な学問的雰囲気についてこう述べている。「全員頗る熱心で、自己の信ずる主張を何ら気兼ねすることなく、披瀝して譲らない態度が見られ、これこそ真剣な研究者の態度である、と感服した次第であった」。ミネルヴァの梟は夕暮れに飛び立つ。学外を本舞台とする実践的活動が終わりを迎えたとき、研究所にようやくアカデミズムへの本格的姿勢が生まれた。これら2編は、研究所の学問的初心を宣言する記念碑的作品であり、そこに漲る真摯な問題意識によって今なお読む者を触発する点で、本学の知的源泉の一つでもある。



*註 上記論集の記録によると、第1回は昭和52年1月22日に、第2回は昭和53年2月21日に連続企画として開かれている。そのテーマ構成は次の通りである。

<第1回>

問題提起：日本にとって何が問題か

第1セッション：日本のエトスについて

第2セッション：文化の創造性と模倣性

第3セッション：国際的使命の自覚

第4セッション：課題と展望

<第2回>

問題提起：文化創造の活力を！

第5セッション：源泉としての宗教性

第6セッション：日本人の思考と行動

第7セッション：資質の自覚と体系化

第8セッション：新しい秩序を求めて

研究所の初心を想起すべく、小論の最後に当時の写真2葉を掲載する。いずれも生研会館で開かれた第2回シンポジウムの折の写真であり、最晩年の荒木先生のお姿を捉える貴重な記録でもある。筆者の推定によれば、写真①の人物は左から順に曾我見郁夫、廣岡正久、井上猛、三木新、中山昭吉、(後姿の人物3人を飛ばして)佐藤吉昭、写真②の人物は左端が荒木雄豪、黒板右から順に荒木俊馬、若泉敬、間宮茂樹の各氏である。

<追記>

このたび廣岡正久名誉教授から貴重な写真2葉を拝借することができた。この場を借りて心からお礼を申し上げます。上述したように、研究所第1期に関する資料は甚だ乏しい。ご関係の各位に資料の提供をお願い申し上げます。



写真①

特別シンポジウム
「世界における日本の文化(続)」の
ひとこま



写真②

【世界の窓】

現地調査報告：第121回アンベードカル生誕祭

於インド・ナーグプール

文化学部 准教授 志賀 浄邦

「私からあなた方への最後の助言の言葉は、『(同朋と子弟を) 教育せよ、(自由と平等の実現のために) 闘争せよ、団結せよ。自らを信じ、決して希望を失わないように』ということです。私はいつもあなた方の傍にいます。あなた方もきっと私の傍にいてくれるでしょうから。」(Dr. Babasaheb Ambedkar Writings and Speeches, Vol. 17, Part 3, p. 276) これは、近代インドに現われた「人間解放の巨星」ともいべきビームラーオ・ラームジー・アンベードカルという人物が、「不可触民」と呼ばれインド社会の最底辺を生きることを余儀なくされてきた人々に向けて語ったスピーチの一部である。

アンベードカルは、1891年4月14日、マディヤ・プラデーシュ州ムホウに生まれた。マハールといういわゆるアウトカースト(旧不可触民)の出身であったことから、幼少時代から苛烈なカースト差別を受けるも学業成績は優秀で、当時の藩王の薦めもありアメリカとイギリスに留学した。2つの博士号と弁護士資格を取得してインドに帰国した後は、生涯を賭してカーストおよび不可触民差別の廃絶のために闘うことを決意する。ネール内閣下の法務大臣としてインド共和国憲法の起草にもあたり、「不可触民制の廃止」を条文化することを果たした。彼と同時代を生き、不可触民制の廃止を目指していたもののカースト制自体は存続させようとしたM. K. ガンディーとは激しく対立する。ま

た、カースト制を正当化する教理をもつヒンドゥー教の枠内にいる限り不可触民差別の解決は不可能であると考え、自由・平等・友愛の精神を説く仏教への改宗を決意する。そして1956年、ナーグプールにおいて30～60万人の不可触民民衆と共にヒンドゥー教から仏教への集団改宗を敢行した。後にインド仏教徒にとって最も重要な聖典となる『ブッダとそのダンマ』を書き上げた直後の同年12月6日、志半ばにして急逝した。

今回の現地調査では、毎年4月14日に行われるアンベードカル生誕祭の開催時期に合わせてナーグプール市を訪問した。ナーグプールの北に位置するインドーラ地区は市内では最大規模の仏教徒居住区の一つであり、そこには一説に全インドで一億人を超えるとも言われる仏教徒の有力な指導者の一人である日本人僧侶の佐々井秀嶺師(77)が活動拠点とするインドーラ寺院がある。佐々井師は1967年の渡印以来約45年間、下層民衆と共に生き、カーストおよび不可触民差別の現実と闘い続けてきた。2003年から3年間インド政府少数者委員会の仏教徒代表を務めた経験ももち、今やインド仏教界に欠くことのできない存在となっている。

アンベードカル生誕祭は、インド仏教徒にとって改宗記念祭(9～10月)に次ぐ最大規模の年間行事の一つである。祭典が近づくと、インドーラ地区は五色の仏教旗と法輪が描かれた夥しい数の旗で彩られる。



写真① 野外に展示されたアンベードカル関連の模型



写真② 聖火を手にラリーを導く佐々井秀嶺師

夜は地区全体にきらびやかなイルミネーションが施され、祝祭の華やぎに包まれる。人々はこの日に向けて、アンベードカルの生涯や思想・カースト差別等をテーマとした模型の制作に取りかかる。仏教徒同士の啓蒙・教育・問題提起などを主な目的とするこれらの模型は、仏教徒居住区の通りの各十字路に展示される。写真①は、数ある模型の中でも一際大きなもので、インドラ寺院近くに展示されていたものである。写真中央には、青いスーツ姿で斜め上方を指差すアンベードカル像が立っているが、電動式で左右に移動する仕組みになっている。向かって左側に描かれているのは、政治家・医者・弁護士等、上位カースト出身で社会的地位の高い者たちであるが、その全員が自分の脱いだ靴を上にあげ下層民衆を侮蔑するポーズを取っている。この構図には、たとえ彼らが束になってかかってもアンベードカルは決して打ち負かされることはないという意図が込められているという。

インド仏教徒たちのボルテージは、前夜祭の行われる13日に最高潮に達する。同日夜9時頃、どこからともなく集まって来た老若男女数百人の仏教徒たちはインドラ寺院を起点としてラリーを開始する。その先頭には聖火を手にした佐々井秀嶺師の姿がある。師は聖火を持ったまま、数人の僧侶と共に全体に電飾があしらわれたラリー特別仕様車に乗り込む。この車の背面には、2メートル程のアンベードカルの肖像画が飾られている。(写真②) ラリーの参加者は、各地からやって来た別のラリーと合流しながら増え続け、何万人規模にまで膨れ上がって最終目的地であるRBI (Reserve Bank of India) 広場に到達する。(写真③) ナーグプールの中心部に位置するこの広場には、一段高くなった場所



写真③ 最終地点に集結したインド仏教徒たち

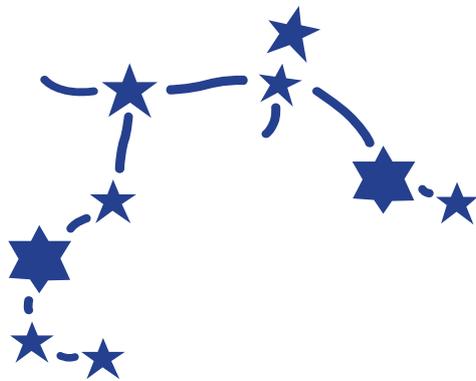
にアンベードカルの銅像が立っている。深夜0時を回り14日になった瞬間、佐々井師と僧侶たちはそのアンベードカル像に祈りを捧げて花輪をかけ、勤行を行う。その後、広場にはバースデイ・ソングが響き渡り、色とりどりの花火が打ち上げられる。仏教徒たちはアンベードカルの誕生を言祝ぎ、その喜びを全身で表現している。前夜祭は、連日40度を超える暑さと相まって異様な熱気と興奮に包まれていた。筆者もラリーに参加したが、気がつくとも仏教徒の渦に巻き込まれ、撮影を求める人々に何度ももみくちゃにされた。このラリーでは、仏教徒の普段は内に秘められたエネルギーが、祭りの熱狂の中で開放され、共振し、駆け巡る。彼らは共に声高らかに歌い、ダイナミックに踊りながら、目的地に向かって前進を続ける。あたかも、参加者全員が一体化して巨大な運動体が形成されているかのようである。

前夜祭の翌朝、改宗広場での公式行事の前に、インドラ寺院において仏教婦人会によるアンベードカルの誕生会が厳かにとり行われた。彼女らは目を閉じ経文を唱えながら一心に祈りを捧げている。(写真④) インド仏教徒は、上記のような「動」の時間のみならず、仏に手を合わせ、自分を見つめ直す「静」の時間も大切にしていることがわかる。

冒頭で紹介した「教育せよ、闘争せよ、団結せよ」というアンベードカルのメッセージは、今やインド仏教徒の合言葉となり、「希望」という名の花の種子として彼らの心に深く根付いている。そしてこの希望の花は、絶えざる実践と運動を栄養源として成長を続けている。彼らはこれからどのような道を進み、どのような花を咲かせるのであろうか。今後も現代インド仏教の動向から目を離すことができない。



写真④ 静かに手を合わせる女性仏教徒たち



京都産業大学世界問題研究所 ニュースレター 第3号 2012年10月

発行 京都産業大学世界問題研究所 京都市北区上賀茂本山 TEL (075) 705-1468

編集 京都産業大学世界問題研究所員 芦立 秀朗

印刷 株式会社 田中プリント
